蒙古襲来(続)

一

蒙古軍総司令官兼、征日本軍総司令官の忻都と高麗軍司令官兼征日本軍副総司令官の金方慶は、文永十一年の十一月十九日、朝鮮の合浦にようやくたどりついた。

だが、忻都の一行は、日本の捕虜男女二百名（或書では少年少女二百人となっているのもある）を引率して、十二月の下旬に、高麗の首都開部に至り、高麗王に献上したと言うから、「軍の還らざるもの無慮一万三千五百余人」と戦史に残る敗戦にもかかわらず、忻都は高麗王に自分の都合のよい報告をしたことであろう。忻都が引率していった日本の捕虜というのは、壱岐、対馬の島民であったろう。

さて蒙古のフビライは、忻都以下の征討日本軍使を翌年の建治元年に、自分の国都北京に招いて、その戦況の報告をきいた。忻都以下の将軍は勝ち戦さの模様を恐らく伝えたのであろう。文

永十一年十月二十日の夜の風さえなかったら蒙古軍が戦いは勝っていたのだから、蒙古軍の副元師は「倭兵（日本兵）十万とあい、戦ってこれを敗る」とその伝記にしるしてある程である。事実日本軍は戦闘の方法が幼稚だったので、これにこりて弘安の役では戦闘の方法を全くかえていた。

「小人はおのれをかざる」というが、その忻都の報告をきき終わるとフビライは、日本征討の決意をかためた。

そして例によって、日本征討の前に、日本行きの使者を命じた。

建治元年二月九日、文部次官の杜世忠が正使、兵部省の次官補、何文著が副使であった。高麗に三月十日に着き、高麗はこれに徐賛という通訳と水夫三十人をつけて日本に送った。

これと同時に、蒙古は軍隊一千四百人を高麗に派して高麗の海防にあたらしめた。

時の高麗王が、フビライに対して、文永の役の直後、訴えた「倭邦（日本）を征討するを以って、戦艦を修造し、丁荘悉く工役に赴き、老弱わずかに耕耘するのみ（略）もしまた事を日本にあげんか、即ち戦艦兵糧実に小邦のよく支うるところに非ざるなり、伏して望む」云々と言ったが、この訴えは、まるっきりききいれられず、十月には戦艦をつくるべし、十一月には兵器をつくること、半島南部の住民から、矢に用いる羽や鉄のやじりの徴発が指示され、戦闘開始前の、強硬な使者の派遣となったのである。

杜世忠の一行は建治元年の四月十五日に今度は従来と変った所に船をつけた。下関の附近で豊浦郡の西方海岸の室津に着いた。これは、九州について、太宰府の役人に抑留されることをさけたのと、この方面の敵状視察をかねていたのであろう。これは弘安四年の役において、蒙古の別動隊が、この長門方面を荒しているのがその証拠となる。

五月二十日づけで、幕府は、周防、安芸、備後の御家人たちに、長門地方を守るべきことを命じると共に、杜世忠の一行を鎌倉に送るように命じた。

建治元年九月七日杜世忠の一行は、竜の口の刑場で斬首された。

杜世忠三十四歳以下名のしるされたものは五名、このうち三名が辞世の詩をうたっている。五人の首はさらしものとなった。高麗の国からつかわされた通訳三十三歳徐賛も斬首されたが、高麗の随行者四人は斬首からのがれて放還された。この放還者の中の者が、五年後の弘安三年の八月、高麗に帰って、杜世忠等の首斬を報告したので、高麗王はこれを元に奏した。

この元使の一行を斬ったことについては、大聖人が蒙古使御書に、

「又蒙古の人の頸をはねられ候事承り候、目本国の敵にて候念仏真言禅律等の法師はきられずして、科なき蒙古の使の頸をはねられ候ける事こそ不便にて候……一切の大事の中に国の亡びるが第一の大事にて候也」（全集一四七二ページ）

と言われている。一切の大事の中に国の亡びるが第一の大事にて候也、とは終戦前には度々引用

された言葉であるが、筆者はこの言葉を大阪の法善寺横町の花月で、漫才師栗丸の口からきいた時は、はあっと胸を打たれるものがあったことを今もって忘れることが出来ない。

さて鎌倉幕府が、杜世忠一行の元使を斬ったことは、熟考の上のことであろうことは、四月十五日に上陸して、斬ったのが九月であるから、相当の日数が経過していることをもってみてもわかることである。大聖人がこれに同情したことは仏者として当然なことと考えられる。

こうした敵の使者を斬ることは、戦争は覚悟の上でしたことであろう。故に鎌倉幕府は元にそなえての軍備はおさおさおこたりはなかったのである。

一二三六年（大聖人十五歳）に、蒙古は欧州遠征を企ててそれに成功したが、その時は遠征にさきだって、五百人のスパイを先行させて、遠征する欧州各地の様子をスパイさせたことがあった。

「カルタスという者があった。その数およそ五百人。服装はひどく風変りで、徒歩で彷徨するさまは、まことに奇異であった。頭には高い帽子をかぶり、体には短い服をつけ、懐には縄をいれていた。さらさらと流がれる小川に、じかに口をつけ、水をのんでいた。食べものを乞うときは、感謝のことばのうちに、神をカルタスと称え、そのほかにもカルタスと言う言葉を多く使ったので、人々はカルタス人と呼んだ。かれらはついにライン川に達したのち、ふたたび道をかえていった。ボヘミアの人たちは不注意を、みずから悔いることになった。われらもこれを咎めざ

るをえない。このものどもを通過させ、国中を自由に歩かせ、みるにまかせ、諸国を偵察するにまかせたことを」（註一）

この遠征で、モスコー、ブダペスト、ポーランドを陥しいれて大勝利を得た。右記の引用はボヘミヤの歌謡の一節であって、蒙古がライン河畔までスパイを放ったことがわかるのである。

文永の役に当って趙良弼の日本滞在は通算約十八か月を数えることが出来るが、この長い滞在は日本をスパイすることにあったことは勿論である。

スパイだと知って蒙古の使者を殺ろしたらどうなるか、それは実に重大なことになる。

ジンギスカンの時代に、ジンギスカンが派遣した四百五十人の隊商が殺されたことがあった。逃がれてきた一人がこれを報告した時に、ジンギスカンは、怒に全身をふるわして山の頂きに登り、地にひざまずいて三日三晩祈りつづけ「この事件の責任は私でなくほかの人にあります、仇を討つ力を私に与えて下さい」と訴えた。そして一二一九年の夏、二十万の大軍を率いて蒙古を出発して、サマルカンド地方を攻略した。

宋は三百年間も続いたが、我が国の弘安二年に南宋として蒙古に亡ぼされている、その南宋滅亡のきっかけをつくったのは、フビライカンの先代メンゲカンの時に、一二四二年（大聖人二十一歳）に、蒙古のユリマスを使者とした一行七十人を南宋に送ったことがあったが、南宋に入ると、ユリマスは早々に拘禁されて湖広の或る城に幽閉されてしまい、遂にそこで病死したのである。

この重大な侮辱を戦争の挑発とみなしてメンゲカンの南宋攻略となったのである。

メンゲカンが病死して、南宋の攻略はフビライカンの手にゆだねられたが、フビライは南宋攻略前に、南宋と親しかった日本を征討して南宋の孤立化を計った。

平の清盛は日宋貿易の利益を十分に承知した人であった。清盛は天下をとると、兵庫港を修築し、これまで宋船は門司関より以内に入ることを許されていなかったが、これを無視した。音戸の瀬戸を通じたのも、宋船の来航を促がすためであった。摂津の福原に別荘をかまえ、後白河法皇の臨幸を願い、宋人の拝謁を願ったこともある。宋国から貿易勧誘の牒書と品物がとどけられた時に「日本国王に賜うの物」という文句があり、公卿たちは「賜う」という言葉は、国の体面にかかわるとし、品物をつきかえし、返牒の用はないとつよく主張したが、清盛は公卿の言葉に耳をかさず、法皇から返書と贈答品をうけ、自分も禁制品の剣と鎧を宋国に贈った。

平安末期から鎌倉時代にかけては航海術や造船術が進歩したので、日宋間は一週間内外の日程であり、宋商人の日本来航は非常に多く博多には大唐街とよぶ宋人の居留地があったという。

宋商のうちには日本に長く留って日本婦人をめとり、日本人の姓を名乗るものもあり、土地を所有するものすらあった。博多の張興張英という宋商は土地を所有しておったので、筥崎宮の玉垣造進の役を負担している。「大平御覧」百科辞典で一千巻に及ぶものだが、宋国の出版である。宋の秘密が外国にもれることを恐れ、国外輸出は禁止されていて高麗国がその配付を願い出

たが、いくら願っても拒絶されたという。然るに日本では、平の清盛によって輸入されて、鎌倉中期には数十部が輸入された。公卿のあいだでは、贈答品として用いられていたというから、高麗に比して、宋と日本とが親密であったことがわかる。（註二）

以上のような日宋関係が、蒙古をして日本を討って南宋を孤立化さそうとして文永の役になったのである。

南宋の孤立化にあたって、南宋の表を日本とすれば、裏は雲南省地方に当る大理国であった。ここから産出される石が「大理石」である。フビライは即位以前に、この大理国を討って南宋攻略の一歩をすすめていた。

一二六〇年（文応元年大聖人三十九歳）即位したフビライは南宋を討つ決意をしたが、それに先だって郝経（かん）等を使者として南宋に送った。南宋ではこの使者を拘留してしまった。フビライは郝経の安否をきづかって、崔明遠なるものを臨安に送り、南宋の挑発行為を抗議したが、崔明遠は逆に命をねらわれたので、危く脱出してフビライの許に帰った。

郝経が南宋に拘留されて十数年の後のある日、開封（フビライの都北京の西方）に住む一人の男が、金明池という池のほとりで雁を射落した。雁の足に絹布がむすびつけられており、字が書いてあった。

「霜落ち風高くゆく所をほしいままにす

帰る時首をめぐらすに是春の初ならん
窮海のとらわれの臣に帛書あり
中統十五年九月一日雁を放つ
うるものは殺すなかれ、郝経」

とあった。

これこそ真州に幽閉された郝経が、番卒の目をのがれて一羽の雁を手に入れ、生命をたくして放ったものである。

郝経は一二七五年（建治元年大聖人五十四歳）に南宋攻撃の総大将バヤンによって救われた。郝経が南宋に使したのが、フビライの即位の年一二六〇年であったから、実に十六年の年月を敵地にすごした訳である。郝経の救出された年、一二七五年の建治元年には日本ではフビライの使者杜世忠以下五人を斬首したのである。

敵国の使者を如何に遇するかは、戦争するか降伏するかいずれかを意志表示するものとなることが以上でわかった。

杜世忠を斬った鎌倉幕府の意志は戦闘にあったことは十分わかる。しかも戦闘も守るだけのも

のではなく、進んで異敵を討つべく計画していたのである。

相田二郎の「蒙古襲来の研究」建治元年異国征伐計画より引用してみる。先ず最初に蒙古征伐の計画のあった文献の出所が面白い。それは、明治三十六年三上参次博士が、石清水八幡宮旧別当家の史料を調査したが、その砌り、八幡宮の御神宝記を手にした時、その用紙の裏面を注意した。そして紙背文書に異敵征伐の文書が記載されていたのである。即ち、

「建治二年三月二十五日御書下る。昨日閏三月二日到来、畏って拝見仕り候。

抑も抑せ下り候異国征伐の為人数名前乗馬物具の員数等の事、子息三郎光重、賀久保二郎公保、夜をもち日をつぎ参上企て候えば申上可く候、此旨を以って御披露有る可く候、恐惶謹言」

これは北山室の地頭足真阿の書き上げである。次ぎは大東亜戦争中士気昂揚のため、よく宣伝された古文書で御記憶の人もあろうかと思う有名なものである。

「肥後国御家人井芹弥二郎藤原秀重法名西向所領田数、当国鹿子木西庄内井芹田二十六町六段三丈、闕所横領されて十一町三段二丈、孫二郎の分三町八段

人数、弓箭、乗馬のこと

西向（此の書き上げの当事者の名）年八十五よって歩行できない。

嫡子越並房永秀年六十五、弓箭、兵杖在り

同子息弥五郎経秀年三十八、弓箭、兵杖、腹巻一領、乗馬一疋

親類又二郎秀尚年十九、弓箭、兵杖、所従二人
孫二郎高秀年満四十歳弓箭、兵杖、腹巻一領、乗馬一匹、所従一人
右下知状にまかせて忠勤いたすべきなり、よってあらあら注進言上くだんの如し」

この紙背文書は三十枚も発見されて、日本の蒙古征伐をすすめたことが如実に分かる。明治三十七年明治天皇が、東京大学の卒業式に臨幸の折、これを天覧に供した程の由緒ある紙背文書となったということである。

（註一）「モンゴル帝国」人物往来社
（註二）「忽必烈汗」人物往来社

二

日本の異国征伐即ち鎌倉幕府の企てた文永後の蒙古進撃は、明治四十二年迄は前述の史料が発見されなかったので、これを云々する人はなかったのである。

異国征伐の紙背文書が、明治四十二年東京大学史料編纂掛から大日本史料とともに編輯発行され、日本古文書の第四の石清水八幡宮の古文書が発行され、その中に御神宝記の紙背文書として

異国征伐のことがあったので、一般の人々がこれを読んで史料として活用することが出来るようになったのである。

紙背文書について更に付言しておこなう。建治二年三月二十日迄に、異国征伐に参加すべき兵員、武具、船舶、船員の書き上げを終了すべく、筑前の少弐経資が、肥後国の守護代、秋田城介泰盛の子息、次郎盛宗に命令を出しておる。この命令書に応じて、地頭御家人から、かくかくの文書によって伝えられた命令を拝承した由が書かれている。その文書の紙が、建治二年五月の筑前国の箱崎八幡宮に奉納した御神宝の目録を記す用紙としてその裏面が利用されたために、今日異国征伐の企てがあったことが史料をもって証明されたのである。この裏面が他に利用されたために遺ったこの時の請文の数は、数十通に達するが、異国征伐という当時の我が国民の敵愾心の旺盛であった情況を知ることが出来るのである。（註一）

但し終戦後の歴史書は現在のこっている若干の注進状をみるとなる程定められた通りに書き上げてはいるか、幕府が期待したような勇躍して参加しようとしたのではなくいろいろの事情をならべて参加が困難だと渋っていたようすがみえる。そんな事情があって異国征伐は実際には軌道にのらなかったらしい（註二）とある。

さて蒙古軍に対する反撃については、石の築地をつくったことは有名で、今でも博多駅の近くの車窓から九州医大の前に元寇防塁の趾というのがみることが出来るが、この防塁の構築工事の

課役に応ずる組と、これに応じない組とがあり、応じない組は異国征伐の方に応じていたのである。

防塁の工事の負担を要害石築地役と言い、大隅の国の石築地役の文言によると、田を一反所有するものについて一寸、一町に一尺という割合になり百町の田地をもつ領主は百尺即ち三十米の長さの防塁を負担しなければならなかった。領主は領内の農民らをひきつれて現地に行き、石材を運ばせ石を積んだが、のちには費用だけを納めて工事を請負わせたという。この防塁工事は建治二年の三月からはじめて、急を要するので八月に完成する予定であったが、実際は翌年の一月に完成した部分もあり、その後もたえず修理や延長工事がつづけられて、最後の記録によると、大聖人滅後の五十一年にあたる元弘二年の幕府滅亡の前年までつづいたと言われておる。発掘調査によると、石築地の高さは二米余、底部の厚さは三米余、海側をきりたたせ、陸側にはなだらかな傾斜をつけ、外面には大きな石をつみ、内部には小石をつめておった。

蒙古に対する幕府の対策としては、この外に、文永の役以後、弘安の役迄の間に、九州の筑後、肥前、肥後、九州に近い周防長門、裏日本では岩見、伯耆、越前、能登なぞには、新しい守護は北条氏一門の者から、そうでないものは北条氏と縁故の深い者がえらばれて、その役についた。これは幕府が創立時代にその勢力は西日本に及んでいなかったが、平氏は清盛の日宋貿易の関係から、九州を大陸貿易の門戸として押さえていたので、平家を亡ぼすと、その勢力をひきつ

ぎ、大宰府の支配権をにぎって、これを拠点にして鎮西奉行をおいておったが、異国征伐をよいことにして、九州の殆んどと長門地方に、北条一族の地頭をおいて幕府の勢力充実と命令の遂行を意図したのである。

異国征伐は残念ながら遂行されなかったがこれが内攻して、爆発したのが所謂倭寇だと言われておるが、時代が約百年も後のことに属するのでどうかと思うが、倭寇のことについてのべてみたい。

倭寇とは高麗の国の沿岸や支那の沿岸を略奪して廻った目本人の海賊をさすのである。これに従事した日本人が、最初は元軍にあらされた、壱岐、対馬、北九州地方の人々で構成されていたので、元寇の報酬ということが言われたのであろう。倭寇の船団は二百隻、五百隻におよび、人員も五千人に及ぶ大海賊群かあったと記録され、倭寇の活躍の絶頂時代（一三七五―八八）には十四年の間に、高麗の沿岸を荒らすこと四百回という記録が、朝鮮側にあるとのことである。

以下は支那側からみた、倭寇の戦さの仕方であるが、面白いと思うので少し長いけれど「明帝国と倭寇」から引用してみる。

一、倭寇の手なれた戦法は、胡蝶の陣といい、戦うとき、扇子をうごかして合図をする。ひと

りが扇子をうごかすと衆がみな白刃をふるっていく。そして刃を急にふりかぶり、明兵があわてて仰むくところを、刃を加えして下から斬りはらう。また長蛇の陣がまえというのがある。鋸葉のへりをつけた旗印を先頭にかかけ、一列縦隊にすすむ、いちばん強いものが先鋒としんがりをなし、そのあいだに強弱を交互におく。

一、賊は毎日鶏鳴とともに起き、地面にとぐろをまいて会食する。それがかおると頭目は一段高いところに座をしめ、衆は命令をきく、頭目は帳面をひらいて今日は某所を略奪する。某が長になり某が隊伍となれという。一隊は三十人。各隊の距離は六百米から一・二粁ぐらい、ほら貝を合図にし、これをきくと互いに援けにいく。また、二、三人が組んで刀をふりまわし歩るく。民衆はこれをみるとふるえあがって遠くにげるか、腰をぬかして首をきられる。夕方になると、かえってきて略奪した財物を献ずる。誰もかくしだてしない。頭目は多い少いをくらべて分け前をかげんする。いつも婦女を略奪してきて、夜はかならず酒盛りをし女を抱き、あとは泥のように眠る。略奪がすむとその家をやきはらい賊はひきあげる。わが方の民が火事に気をとられて迎えうちをしないうちに、全員脱出するのである。

一、賊がやってきて村人が酒肴を出すと、毒をおそれてます村人にくらわせ、そのあとで食べる。市街をゆくときは、待ち伏せを警戒して大通りをあるき、横筋は通らない。また城壁にそっていかないのは、上から石や瓦や煉瓦を投げつけられないためである。

一、行軍は一列縦隊でゆっくり歩調をあわせていく。それゆえ、延々として二十粁ものあいだを占めることになり、近くを馳せることができない。また数十日たってもつかれない。それから陣形はまばらにしてありすぐ包囲をとることができる。

一、敵の陣営に対するときは、まずひとりを跳躍させ伏せさせる。そこへ明側の矢石や火砲を集中させ空費させる。

一、敵陣をつくときは、必らず偵察させ、それが先ず動いてのち突入し、勝ちに乗じて長駆し戦いがたけなわになると、四方から伏兵がおこり陣の後をたつ、そこで敵軍は驚きつぶれる。

一、彼等はいつも奇怪な術をつかう。たとえば陣頭にくくった羊とか、婦女をおいたてるとか、みるものをおどろかせる。眩惑されているあいだに、かれらは二刀を使い、上にあげた刀に気をとられていると下の方が斬りこんでくるのでかなわない。

一、鎗をとると、柄をうしろにして、先きを握ったままいきなり投げてくるので見当がつかない。

一、弓は長く、矢は大きい、それに人が近づいてから射るので命中する。

一、引きあげた跡があると、それは侵攻をしめし、気勢をあげる場合は、のがれさることを意味する。言えに破れた船を横たえ、にげたとみせかけて突然つき破った。また竹棒をつくって攻めるとみせかけてたち去り、おちのびるとみせかけて城に迫り、陸路をいきたいときは舟棹をも

っていく。あるいはわなをしかけて坑といっわり、また繩をゆわえて走るのをひっかける。或いはそいだ竹を土にさしこんで、にげだすのをつきさす。（目下北ベトナムで使用されている）

一、いつも玉帛、金銀婦女をおとりに使って、わが軍の進攻や迎えうちをさまたげる。

一、かれらの根拠地付近の住民に恩賞をあたえるので、虚実はよく察知している。

一、かれらに降った職人たちには十分に賞物をあたえるので、道具類をとりそろえるのに便である。（蒙古軍は職人を沢山捕虜にして蒙古におくって仕事をさせていた）

一、スパイにはわが人民を使うのでつかまえにくい。また案内役にはわが人民をつかうので進退をよく知っている。

一、あらかじめ金持の姓名を帳簿につけて順をおっていくので略奪品が多い。

一、食事をとり泊まるときは家の壁を破り或いは、高いところにいて見下ろすので襲うおりがない。

一、ときに重囲におちいるとにせ首を使ってのがれる。或いは変装してみのを着、笠をかぶって田のなかで小便をする。あるいは遊び人のかっこうで町をぶらつく、そのためわが軍がかえって賊にかこまれ、また良民を疑って遂に殺すことになる。

一、賊はわが民を虜にし、道案内や水くみをさせるが、朝夕出入のとき、名簿をみて名をよぶ、そのためどこへいっても名簿を一冊つくり姓名をかきとめ、班を分けて点検する。本当の日

本人は（倭寇も後の時代になると、倭寇と称して明人がこれを行うようになった）すくなく数十人にすぎないが、これが先鋒になる。かれらが本国にかえるときは、「遠慮申しあげてかえる」という。

一、かれらはわが軍につかまり殺されたときはみなかくして発表しない。ために隣同志知らないというありさまである。

以上が倭寇の侵略戦術であるが、名を名乗りあって一騎勝負を専らにした、戦闘体形からみると、よくもこう変化したものと思われる。これは文永、弘安両度の役を境にして、戦争の仕方が全く変ったことを示すものである。平安、鎌倉時代の武士は、武芸を特業とする職能集団であった。武芸の中心は騎馬と弓であった。武士の戦闘が一騎討ちを原型としたのが、その証拠である。武士にこのような特技が必要条件だとすると、高価な馬をもって日夜武芸をみがくだけの経済的余裕がなければならない。だから武士は武者の家とよばれる特定の出身者に限られた社会制度が発達した。ところが、集団戦となると、若党や仲間なぞが戦闘員として使用されるようになった。馬を射ってはならないぞという一騎討ちの時の禁則なぞは通用しなくなってしまった。

戦功のみわけ方も集団戦となると変化してゆき、ついに「分捕切棄の法」という戦功の証明方法が出来上った。これは建武五年（一三三八）高師直が北畠顕家の奥州軍を迎え討った時に用いられたという。分捕りというのは敵の首をとることであって、最上の戦功である。この証明方法

では、敵の首をとってもその度毎に首実験をしてもらうとか、戦闘が終わるまで、後生大事に首をかかえているとかしてはいけない。首をその場にすてよというのである。それでは大事な戦功はどうなるか、敵の首を分捕った功をたてたものは、軍奉行が、その場にいれば軍奉行に、また軍奉行不在の場合は「同所合戦の土」すなわち、その場でいっしょに戦っている他の武士に首を示して戦功を確認してもらう。そしてその首をすてて戦闘を継続することになる。歩兵の大量採用によって集団戦、ゲリラ戦が発達する反面、従来の戦功認定法では、機動性が低下するのでやむをえなかった。集団戦の必要から槍があらわれたのも（一三三四）当然であった。肉迫戦闘で槍を用いて最も威力を発揮できるのは歩兵である。即ち歩兵が騎兵と戦うばあいである。槍身は刀剣よりおとるのは槍はつく用を果たすだけで、刀のように折れるのを考慮する必要がないことにもよるが、もう一つは槍は歩兵用だったからである。

文永、弘安の二役を経過することによって日本の戦闘史にも変化をあたえて、ついに歩兵の出現ということになったのである。

さて余談に紙面をつかって、非常に恐縮でした。

蒙古の始祖ジンギスカンはその生涯に国を亡すこと四十、朽木をぬくように大帝国を倒し、人

を殺すこと数百万と言われる。蒙古帝国の最盛期は、当時知られていた世界の五分の三以上、西はロシアとポーランドの一部、中央アジア、シベリア、西アジア、南は安南ジャワ、中国全部と朝鮮がその版図であったから、実に史上空前絶後の大帝国であった。

しかも、蒙古民族の数と言えば、三十五万から、五、六十万程の蒙古人が中心であるから不思議である。故に戦争の時は異民族をつかって、これを先頭にたてて戦争をしていた。

文永、弘安の役でも、蒙古人は非常にすくなく、文永の時にはその主力は朝鮮人であり、弘安の役の時には南宋人と朝鮮人とであった。

蒙古人は人種の区別をしなかったという。中国を支配するのには、主な官吏は、中央アジア人とかアラビヤ人トルコ人をつかい、その反対にイランには数万人の中国人がいったという。ジンギスカンの孫イルカンは小アジアを治めたが、ペルシャを征服して中国の陶工を二千人よんだという。中国人がロシヤにもいっておる。逆に蒙古の首都となった北京の門を守っていた兵隊には、ロシヤ人、ハンガリー人、トルコ人がいた。それから蒙古の遠征中に蒙古兵につかまって、むりやり蒙古人にサービスさせられた者の中にはイギリス人やフランス人、ドイツ人もいたといわれる。

こういうことがあったので、空前絶後の一大帝国を維持することも出来たが、逆にこれが欠点となって失敗することもあった。日本進攻の場合は、朝鮮や支那の服属軍で構成された軍隊であ

ったから、戦意の点においても欠けたし、またその使用する船舶も、朝鮮人を鞭で叱咤してこしらえた急造の船や兵器の粗悪さも手伝って敗戦をきっしたとも言えるのである。

しかし何分にも世界の五分の三以上の一大帝国であったから、その蒙古の首都カラコルムは国際的にすばらしいものがあった。

ヨーロッパからはるばる蒙古に旅行して皇帝に拝謁したキリスト教のフランチェスコ教団宣教師ギョーム・ルブルクの記録によると（一二五四）、

「カラコルムには二つの大通りがある。一つはイスラム（回教）通りと呼ばれ沢山の市場があり、また多くの外国の使節や商人がすんでいる。もう一つは中国通りでここには職人がすんでいる。カラコルムには多くの官庁のほか、仏教寺院十二、イスラム教寺院二、キリスト教会一がある。この町全体が土壁でかこまれ、東西南北四つの門がある。東門の外では穀物がうられ、西門では羊と山羊、南門では牛と車、北門では馬がそれぞれ売られている」

一二六七年（文永四年）のマルコポーロの北京の記録によれば、

「都市全体は線で区画されている。町の街路は糸のように真直ぐに設計されている。一つの側から他の側がみられるほど真直ぐで広い、各城門はちょうど、他の城門がみえるように設計されている。そして各々の主要な街路の両側にそってあらゆるところにあらゆる種類の露店と商店とが

ある。都の中央には非常に大きく高い楼閣があり、その中には大きい時計（時鐘）があってそれは夜ごとに三度なる。何人も三度ならされた後には町にでかけないのである。その鐘がその回数だけなったのちには命令で規定されているので、なにびとも出産のための婦人の必要と病人の必要で行く医者とのほかはあえて町を歩るかない。このような正しい目的のために歩るくものは、灯火をたづさえなければならない。そして各門は夜間は一千人のものによって守護されるよう命ぜられている。守備兵は常に夜の間、都中を三十人、四十人と隊を組んであるき、時ならぬ時、すなわち第三番目の鐘がなった後に誰かが歩るいているかどうかを捜索し検査する。もしかれらが誰かをみかけたならば捕縛しただちに投獄する。そして朝になったらその任にあたるものがその捕われものを訊問する。

皇帝の宮殿は屋根は非常に高い、そして周囲にはすべて二ペースの厚さの鋪装と同じ高さの大理石の壁がある。広間と部屋との壁はことごとく金と銀とで覆われており、そして竜と獣と騎士と他の種々の美しいものとの戦の物語りがかかれている。広間は非常に広くて、六千人以上がともにテーブルについて食事することができるほどである。そして、その宮殿には四百の部屋があってみるも驚異である。そして屋根は悉く赤と緑と黄と、そのほかすべての色である。それはあたかも水晶の輝くように、見事に釉薬が施されているので、宮殿のまわりは遠くから輝いている。宮殿の後には大きい家屋と部屋と広間があり、その中には君主の私用品すなわち、彼のすべ

ての宝物、金、銀、宝石と真珠とかれの金と銀の器がある。一つの城壁と他のものとの間には、芝生と美しい種々の果樹があり、その中にはまた種々の美しい獣がいる。これらは白鹿すなわち麝香をつくる獣、小鹿、まだら鹿と栗鼠と他の多くの美しい獣である。そして城壁の内側のすべての土地には、これらの美しい獣が、散歩路をのぞいてことごとくみちている。

北西の方に非常に大きい湖がある。その中には多くの魚がいる。うた白鳥と水鳥がいる。丘の上には決して落葉しない美しい樹でみたされている。もし誰かが皇帝に、これこれの美しい地域に美しい樹があると語ると、かれはそれを根と多くの土ごと取らせ、その丘に植えるために象でそれを運ばせてくる、そのためここには、世界で最も美しい樹がある」

元朝末期の中国人陶宗儀は、宮殿の構造と豪華さをのべ、都城の周囲六十里で、十一の門を構えていたと伝えておる。

（註一）　「蒙古襲来の研究」相田二郎

（註二）　「日本の歴史八巻」中央公論社

三

「日蓮が蒙古を諸国日本膺懲の天使として解釈したのは、日蓮が当時の蒙古や高麗の仏教に通じていなかったことを裏書きする。というのがほかならぬ蒙古がじつは真言仏教と因縁あさらぬ国だったからである。たとえばフビライの尊信をうけていたチベット人のロートエ・ギャンツェン（一二三三年生れ）はフビライから「大宝法王」の尊号をうけ、一二五一年（建長三年）チベット全土の統治を委任された人物であって、彼の仏教は、顕密融合し、清弁一派の中観を用いて、密教本義の解釈とするばかりでなく、同時に、また顕教の五位と密教の四部とを対合して修行するものであった。そしてチベット仏教と同様の蒙古のラマ教は、左道密教の系統につらなっていたのである。だから日蓮が、蒙古を真言誇国日本退治の天使に擬したのは、蒙古の国内事情とりわけて仏教の事情に通じていないところから生じた一種のこじつけにすぎなかった」――「日蓮の思想と鎌倉仏教」戸頃某―とある。

読者は次を読んで判断して貰いたい。

「ボーロ兄弟は使節一行と共にながい族路をかさねてフビライのもとについた。かれらがフビライに謁したのは北京であったが、内蒙古の上都であったかはわからない。フビライは非常に満足

し西方の国々と民とについてさまざまな質問をしたが、フビライがとくに興味をもったのは、ローマ教皇とキリスト教のことについてであった。フビライはポーロ兄弟に莫大なおくり物を与えた上で、コゴタルというモンゴル人と共にローマ教皇のもとに行き、フビライからの親書を呈し、キリスト教の学者で、修辞、論理、文法、算術、天文、音楽、幾何の七芸に通じた者百人をつれてかえり、かつエルサレムのキリストの聖墓にともされているランプから聖油をもらってくることを命じた。フビライのキリスト教に対する関心の深さはおそらく事実であったろう。モンゴル人の宮廷には多くのキリスト教徒がいたし、フビライ自身の生母もキリスト教徒であった」

――「マルコポーロ（岩波新書）――

併読して貰えば掲載の意味がわかると思うから駄弁を弄しない。

この文中でポーロ兄弟というのは、マルコポーロの父と伯父とのことである。この兄弟は十五年目に自分の故郷である伊国のベニスに帰った。マルコの父であるニコロ・ポーロは帰宅してみると彼の妻は亡くなっており、彼れが出発の時、まだ妻のお腹にいた子供即ちマルコは十五の少年になっていた。

ポーロ兄弟は、東方駐在のローマ教皇使節に面接して、フビライの親書を示した。教皇使節はフビライの親書をみて、東方伝道のまたとない機会を知ったのである。しかし、その時は法皇が亡くなられた直後で、新らしい法皇が選挙されておらなかったので、それ迄まつように言われ

た。ポーロ兄弟は新法皇が選出されるのを待ったが、中々選出されないので、フビライから依頼された、百人の学者をつれてゆくことをあきらめて、エルサレムに行って聖油をもらって帰ってきたが、その間に、最初にフビライの親書をみせた、ローマの東方駐在員の教皇使節が、グレゴリオ十世というローマ法皇の位についていたので、これに面接した。新法皇はポーロ兄弟及びマルコポーロに拝謁を許るし、この人々によってローマ教会を東方に拡大することを考え、フビライの要請する「百人のキリスト教の賢人」を同行せしめようとした。しかし選びえたのは二人であった。（この二人は共に説教僧教団の僧であってこの僧の中の一人のイスラム教とサラセン人に関する著書は現存しておるという）法皇はこの二人の僧に対し、主教と僧侶に対する叙任権を与え、フビライへの贈物を託して、五人に祝福をささげた。

二人の僧は険阻な行路と荒涼たるアルメニヤの風土に恐れなして遂に途中で逃げ帰ってしまったが、ポーロ及び父と叔父とが三年半に渡る大旅行の末、フビライの都北京に達したのは一二七五年（建治元年聖寿五十四歳）と言われておる。

その後マルコポーロは、フビライの使節として各地をあるき、または知事として赴任したこともある程の信任をうけたという。フビライに仕えること十七年、ついに使をえて帰国するようになって、泉州の港から船出してイタリヤに帰国したのは一二九五年（永仁三年）で二十四年ぶりであった。其の後マルコポーロがその旅行記を「東方見聞録」として出版したのである。

ローマ法皇は蒙古国に一二四六年（寛元四年聖寿二十五歳）と一二九四年（永仁二年聖滅十三年）の二度使節を送っている。

一二九四年に送られた使節はフランチェスコ派の宣教師モンテ・コルヴィノで、コルヴィノは五十近くになって法皇の命をうけてインドとカタイの伝道に派遣された。彼は北京のモンゴル宮廷に対するローマ法皇使節であり北京駐在の初代大主教であった。

モンテ・コルヴィノはまずインドに赴き、そこに一年滞在した後、中国にいたった。彼の中国における活動は一三〇五年及び一三〇六年の彼れの書翰によって知ることができる。

それによると彼は北京にあって最初の十一年間はただ一人で伝道に従事したが、後ちにイルン生れのドイツ人が加わったという。彼はフビライを改宗せしめることには成功しなかったが、七歳から十一歳までの男の子百五十人に洗礼を授け、かれらにラテン語とギリシャ語をしこんだ。北京には彼によって鐘楼のついたカトリック教会堂がたてられた。彼はまた新約聖書と讃美歌をタルタル語に翻訳し、モンゴル人のネストル教徒であった。ゲオルギスという貴族をカトリックに改宗させた。

コルヴィノはペルシャでイタリヤの商人ピエトロという人と知り合いになったが、このピエトロはコルヴィノとともに北京にきて、北京で教会堂の敷地を買収し、それを教会に寄附した。この教会はフビライの宮殿からほど遠からぬ地にあり、鐘楼の鐘の響きや、教徒の合唱する讃美歌

の音は「フビライの耳に達しかれを喜ばせた」という。フビライ自身はついに改宗しなかったが、コルヴィノに対し、ローマ法皇や、ラテン諸国について色々質問し、彼に多大の好意を示した。

コルヴィノの書翰は無事法皇庁に達し彼の活動が知られるに及んで、法皇は一三〇七年（徳治二年聖滅二十六年）彼を北京の大主教に任命して一三一一年には三人の属司教を北京に派遣した。かくてコルヴィノは生涯を中国伝道につくして一三二八年北京において生涯をとじた。

モンテ・コルヴィノが建てた極東における最初のカトリック会堂は内蒙古にあったが、その所在は近世になってもながい間確かめられなかった。その所在が、土台の遺構や散乱した石材にみられる十字架のしるしによって確証されたのは日本の考古学者たちによってである。（註一）

所詮フビライのキリスト教に対する態度は織田信長がバテレンに対する態度と同じであったと思う。フビライの時にチベットの僧パスパなる人が、フビライに迎えられて、蒙古の文化の興隆に貢献したが、政治的権力と結びつき、秘密仏教の堕落的傾向におちいりこれを一掃するために、宗教改革の運動を行ったという。

従って、地理的に近い中国をひかえ、多数の全国の亡命者に接していたので、蒙古人は仏教は早くから知っていただろうが、これは深くモンゴル人の心をとらえなかった。深遠な哲学的教理が理解しにくかったかもしれない。キリスト教（ネストリウス派）が蒙古に福音をもたらすの

は、まずトルコ系のオングット・ナイマンなどの部族のあいだであり、モンゴル人自身のあいだに信者をうるようになるのはずっと後になってからだ。

イスラム教は砂漠の宗教として、単純に理解されたかもしれないが、モンゴルの諸王の中でもっとも早くこの宗教に改宗したのは、イルカン朝のガーザーンであった。蒙古人は一切の宗教に寛容ではあったが、自らイスラム教になるようなことはなかった。

支那では昔から、米をたべる南方人は帝座につくことはできないが、乾うどんをくらう北京人はそれが可能だという伝説があるという。現代でもパン食人種のヨーロッパ人が、米食人種をおさえて世界を征服している事実はこれと似ているといわれる。北方のシナ人は上海付近の民衆にくらべてモンゴル的で、気力の喪失にめげず、辛苦の生活にたえることが出来るが、シナの東南の沿岸や揚子江の南では、精神的には発達しているが肉体的には退歩しているという。モンゴルが何故世界を征覇したかというと、相手が弱かったからだという単純な理由をあげる人がある。

それもそうだろうが、相手に比して戦術がすぐれていたことを、相手が弱かったと言うのだと思う。

蒙古の戦術といえば、日本には水軍をもって二度も進攻してきたから、我らは艦隊の戦術を思い浮かべるが、これは蒙古人からみれば、全く未経験の戦争であった。だから文永、弘安の二役において、本当に戦ったのは南宋人と高麗兵であった。蒙古からみれば、捕虜をつかっての戦争であった訳である。使用しておる戦艦も、被支配下の国家の金と人夫をつかってこしらえた船である。どう考えたって上等とは言えない。陸上の人々が一向気にしないくらいの風で（文永の役の時、八幡愚童訓には風の記載がない）一夜に逃げ帰ったというのは、船の堅牢に疑問がもたれるところもある。死者多数というが、これとても被支配下の民族だから、誇張した報告を支配者たる蒙古に報告して、日本進攻を思いとどまるように報告したとも考えられる。兎も角、蒙古が日本を攻めたことは、彼等の従来の戦術から考えると、全く勝手のちがったことに手を出して、負けるべくして負けたというのが本当だと考えられる。

岩村忍博士と蒙古の研究家小林高四郎氏の対談（註一）によると、蒙古が何故強かったと言うことを次のように話し合っておる。

蒙古兵の食料は主として羊であるが、これを戦場につれていった。兵隊の食糧が自分の足で歩いてついてくるんだから非常に便利だったと言える。そして騎馬戦が主であった。全員が馬にのっておるから、もし腹がへれば馬の肉をたべるし、弓の弦がきれると馬の足の腱をとってそれに代える。矢ジリがなくなったら馬の骨をけずって矢ジリにする。こう考えると、兵器も食糧も兵

隊に歩いてついてくる、否な食糧にまたがっていて戦争が出来たとも言えるのである。

馬を食うのには、日本の兵隊も驚いたとみえて「八幡愚童訓上」に「元より牛馬美物とするなれば射ころしたる馬を以って食とせり」とかいてある。そして、一面に日本兵が立ちならんでよせてゆけば、中の蒙古兵はしりぞいて両方の端の蒙古兵は日本兵をつつむようにしてとりかこんで皆殺しにしてしまった。そして本当に死んでしまった日本兵の腹をあけて肝をとってこれを飲んだと八幡愚童訓にはかいてある。蒙古兵は食糧と戦争しているといっても差しつかえがない。食糧にことかかぬならば、戦争は半分は勝ったようなものである。

ヨーロッパでドイツとポーランドの連合軍を蒙古平が破っているが、ドイツやポーランドの連合軍は重い鎧をきた騎兵であり、農民兵をつかっておる。農民兵は歩兵で殆ど武装してない、それを全部が馬に乗った機動力のすこぶる早い蒙古騎兵にはとうていかなわない訳である。だから騎兵戦は、第二次大戦の時のナチの機甲部隊と同じ原理で、タンクの代りに全員が馬に乗ってるということになる。戦争の勝負は武器如何でいつの世でも決定するといってよい。秀吉が朝鮮に出兵して一応勝利を得たというのも朝鮮軍には鉄砲がすくなかったからだと言われておる。

ジンギスカンが、西征の時に使用した武器としては弩砲（矢を射る砲）三百、槍弩砲（槍を発射する砲）三百、撞壁車（城壁をつき破る鉄車）それから南宋を攻めた時には、ウイグル砲（石をなげる機械）及び「震天雷」という鉄砲であった。これは宋・金時代に西アジアから移入した

もので、火薬を用いて鉄丸をとばす手榴弾の一種である。閃光を発して大きな音で爆発すると、人も馬も耳を聾し目もくらんだ。命中すれば人馬を殺傷するに十分であった。

騎馬ということと武器にすぐれていた訳でこれに対抗する武器がなければ、相手は弱いに違いない。単純な理由と前述したが、実は内容はこれ程の理由があるのである。

中央アジアでは十三世紀の蒙古人の破壊した後が七百年の今日でも、そのまま残っておる所があるといわれる。

中央アジアでは農業の耕作は地下水道でやる、これをカレーズ（一般にはカナートと発音しておる）という。その地下水道を蒙古兵がこわしたので、七百年たった今でも耕作か不可能だという。蒙古軍が抵抗されたのを怒ってカレーズを全部こわしてしまった。それで今は不毛の地になっているという、それ以前は大きな穀倉地帯といわれていたという。

今アメリカが、蒙古人に破壊されたところを以前の農沃な地帯にしようと何億ドルもかけておしておるという。

カレーズは掘るのに相当技術を要し、ムカニーと呼ばれるカレーズ職人は、村の中でも重要な地位をしめ、その職は世襲で、ムカニーはもっとも尊敬されるという。四キロぐらいのカレーズを掘ると二年の月日と五百万円から八百万円ぐらいはかかるという。そこでカレーズを作った者は、そのカレーズの水が灌漑する土地を所有できるという慣行が広く行なわれているという。

なんにしても七百年前の蒙古の破壊した場所を七百年後、アメリカがなおそうとしているというのだから面白いと思う。

（註一）　歴史よもやま話―文芸春秋社

四

弘安二年の二月の六日、三百年に渡る宋国は亡びた。九歳の衛王は、陸秀夫に背負われて海に投じ、多くの女官や随従の忠臣たちもこれを追って入水した。中国歴代の王朝を通じて、南宋の末路ほど悲惨なものはないと言われておる。しかもそれが、くしくも、我が国の平家一門の末路に似ておるのは歴史のめぐりあわせと言うべきだろう。

宋国の亡びたその翌日、江南の四州に世祖フビライの勅が出された。日本遠征のための戦船六百艘を建造せよとの命令であった。

フビライは南宋の降伏した将兵を日本遠征に利用することを考えた。范文虎（はんぶんこ）というものが降伏した諸将の中にいたが、この者がフビライに迎合して、自分が直接日本へ使者をおくり、元への服属を勧告しましょうと答えた。これは宋国と日本とで相互貿易の歴史がながかったので思いつ

いたのであろう。

茫文虎の派遣した使者は弘安二年の六月の末対島に到着した。使者は周福欒忠（らんちゅう）を主とし陳光という通訳がいた。使者は対島から博多にうつされた。建治二年九月元の使者を竜ノ口に斬った日本側の態度は、かかるものを相手とはしなかった。一、二か月後、鎌倉に送る迄もなく、博多で使者の全員を斬首してしまった。

弘安二年の八月に、竜ノ口に斬首された杜世忠等とともに日木に渡った水夫ら四人が、日本から高麗にからくも逃げ帰って、杜世忠の殺された情報をもたらした。ただちにこの情報は元朝に報告され、元朝の日本征服の態度ははっきりと決まった。

既にこの年の六月に高麗に対しては九百艘の造船が命ぜられていた。

弘安三年の八月には征東行省という日本征討のための機関が設立されて、忻都（きんと）、洪茶丘（こうさきゅう）、茫文虎らがその責任者となった。高麗は兵船九百艘の外に、漕手、水手一万五千余名、正軍一万余名と十一万七百余石の兵糧と沢山の機械類の提供を命ぜられた。

弘安四年の二月二十日の日を期して東征軍は元の都大都（北京）を出発と決定したが、征東行省は高麗の合浦から発進する東路軍と、支那の江南から進発する江南軍とをもって征東軍を構成する方略を決定した。

東路軍は忻都洪茶丘の第一軍団モンゴル人と漢人の本国軍―第三軍団―高麗軍―からなり総数

四万、江南軍は茫文虎のひきいる南宋人を主力とする十万の第二軍団である。江南軍は兵船三千五百隻で、寧波（ニンポー）とその前面の船山島から出航して、東路軍と壱岐島で合流して太宰府をめざしたのである。

東路軍は五月三日合浦を発して途中巨斎島により、五月二十一日高麗軍の一部を対馬に上陸させ二十六日壱岐島に向った。

八幡愚童訓によれば、

「人民たえかねて妻子を引具して深山に逃げこむ処、赤子のなき声をききつけて押しよせ殺しける程、片時の命も惜しければ、さしも愛する嬰児をさし殺してぞかくれけり。子を失い親ばかりいつ迄もあらん命ぞと泣き歎く心中いかにせん。世の中にいとしき物は子なりけり。それにまさるは我身なりけり、と読置し人のすさみ今ぞ知る」

戦争の悲劇である。第二次大戦直後、満洲引き揚げの人々は、この悲しみを味わったということである。

壱岐島周辺の海上で十日ちかくすごした東路軍は、此処で江南軍と落合う予定であったが、江南軍がこないので、六月六日、単独で博多の沖、志賀島にせめよせたのである。

文永の役の時には、元軍はやすやすと博多湾内に深く進入して上陸作戦をとることができたが、弘安の役ではそれが出来なかった。

それは、名嶋、箱崎、博多、百道原、姪の浜、生の松原、今津に渡って構築された石築地が元軍をはばみ、それによって各国の御家人がそれぞれ守備していたからである。

その外、この時には敵船襲来の報知の手段がととのっていたという。対馬で敵船の襲来を望見すると直ちに狼火（のろし）を上げる。この合図に応じて壱岐島にてあげ、これに応じて肥前の鷹嶋にて上げ、かくて肥前筑前の陸上に逸早く敵船襲来の報知をするという手段である。弘安の役にこれを利用したという適格な文献はないが、それが推量される文献が永仁年中にある。

博多湾の入口のせまい一島である志賀島やその海面に敵船を取込めて、これを陸上海手の両方面から強烈に攻撃して、元軍をうったのはまことに当を得た戦法であり、文永の役とは全く異った戦いの模様を展開した。

八幡愚童訓によれば、その戦は、

「先づ一番に草野次郎二艘にて夜打ち寄せて異賊船一艘に乗り移り、二十一人が首をとり、火をかけてこそ帰りけれ」

と、いさましく書き始めておる。

進退の自由な小舟を利用しての海上奇襲戦に蒙古の軍船は其の後用心して、船を鎖りでつなぎ合せてこれに対し、奇襲の小舟に、蒙古の軍船から石弓を打ってこれを撃滅した。日本船は小さ

いので石弓にうたれて破ぶられ、十中の八九は死んで生きる者は稀れであった。

これでは夜討ちはやめて合戦の仕方を変えようと呼ばわりあったが、この時に伊予の国の住人で河野六郎通有は、そんな呼ばわりには耳もかさなかった。

河野六郎通有は、異賊警固のために本国を立つ時に、十年の中に蒙古が来襲しなかったならば、異国に渡って合戦致すべき旨の起請文を十枚迄もかいて、氏神の三嶋神社の社殿で、起請文を焼いて自ら飲んだという武士である。この八か年まで待っておったのに今その時を得た、こんな身の幸いがあろうかと、大いに勇んで、兵船二艘をもって蒙古の軍船に押しよせた。これをみると蒙古勢は一勢に矢を放ったので郎等四、五人はうたれ、伯父も矢を射られて手負となり、自分も左肩を強くうたれて弓をひく力もなくなったので、片手の抜刀をもって自分の船の帆柱を仆して蒙古の船にさしかけて、敵船の中におどりこんだ。散々に切りまくって敵の首を多くとったが、その中に大将軍とおぼしき王の冠りをかぶったものを生捕りにして悠々と帰ってきた。

その他大友の嫡子蔵人は洲崎をつたわってせめよせて敵の首一つとって帰った。九州の軍勢は思い思いに大いに力戦をした。また関東武士の手なみの程もみたまえと、新左近十郎、今井彦次郎、財部九郎等の伯父甥散々に戦って命の限り戦って打死したのはいさましかった。志賀嶋の上陸元軍と日本軍との戦いは六月六日の夜半から十三日迄つづいたが、蒙古軍は戦い利あらずと思ったか、遥か鷹嶋へと船をしりぞけ江南軍の到来を待った。

この戦闘中高麗軍の一団三百隻は、かつて元の使者杜世忠が到着した長門の国の室津方面に、宗像の沖を通過して着岸した。

「長門の国に向った敵船に関する事実は、着岸したというに止まってその詳しい情況は分らない、恐らくさしたる活動もせず本隊に引返したのだろう」といわれておるが、心理的には日本国民に相当の大打撃を与えておる。

長門の国に蒙古が現われたということは、遠方の人々には、九州勢が大敗したので長門の国に上陸したとの錯覚を起こさせるのに役立ったのである。即ち八幡愚童訓によると、

「九州既に打ち落され蒙古軍長門着、只今せめのぼらんとも申す、東海北海よりもはや来りなんともひしめきけり。ひとまずいづこへか逃がるべしとささやきても、されど言うものはなし、米穀類は西国より上らず、京都の商人は売買たやすからず、蒙古乱入せずとも此の飢渇には死ぬべし」

とあるから、上陸せずとも、上陸した程の効果はあげていたといえるであろう。

「元寇の新研究」池内宏著によると、六月八日夜半より八日及び九日に至る戦争の史料は日本側に書きもらしておるが、ここに珍史料と称し得べき一面の古碑があるといって「それは去る大正十四年岩間徳也氏が遼東半島の金州城外で発見した元の百戸張成の墓碑銘である。張成は東路軍の従軍者の一人である。この墓碑銘によると、八日及び九日の戦いが、六日の夜半から連日筑前

の志賀島附近で行なわれた交戦の一部であることがわかる。その墓碑銘によると、

六月六日倭（日本）の志賀島に至る。夜半賊兵（日本兵を言う）来襲、君（張百戸のことを指す）所部と艦によって戦う、賊舟すなわち退く。八日賊陸によって復来る。君は纏弓弩をひきいて先づ岸に登って敵を迎う（略）敵賊すすむことあたわず、曰哺（夕暮）賊軍復集まる。又返して之れを敗る。明日（九日の意）倭大いに兵を会して来る。君、所部をすべて陣に入り奮戦す賊○○あたわず――使宜上延べ書きにする。

――張百戸は諱は成、宋の人至元十二年（建治元年）元に降り、その後戦功をたて至元三十一年（永仁二年）彼の封録の地金州の管内の地で歿した。墓碑はその子供によって建てられた。墓碑は我が朝の弘安四年（至元十八年）の四月、倭を征するため合浦を発すとしるされており、これを読むと元軍の勝利ばかりを伝えておるが、元軍が志賀島附近で戦闘した様子が伺える。――この墓碑銘によって、八幡愚童訓の、

「大友の嫡子蔵人は三十騎計にて州崎を伝ってせめよせる、戦て頸一つ取り帰りける」というのが、戦況は逆に表現されておるが、事実は証明されている。

元軍を志賀島の辺でとどめて、博多湾内に侵入させなかったことは、元軍の文献によってもわかる。

「東行二百里志賀島のもとに艤す。日本兵と遇う。彼は大勢陣を結んで動かず、千人を出して逆戦数十合、両日に亘りて我が師既に勝つ、転戦してすすむ、呼声勇気海山震盪す、殺し獲る所十余万人、太宰藤原少卿弟宗資を擒にす」

とある。十余万人は誇張であるが、宗資というのは少弐家の系図にはないが、有力な武将が捕虜になったことはたしかである。この戦闘は弘安四年の六月の六日夜半より十三日迄つづいたことは八幡愚童訓によると、

「去る六日より十三日に至る昼夜の間合戦す、打ち殺す蒙古千余人、残る所船共引き退く由申けり」と書かれている。

残る所船共引き退くと八幡愚童訓に書いてあるが、何処に引き退いたかというとこれに二つの説があり、

「十三日には東路軍の軍船は肥前の鷹嶋あたりに退いたのである」（註一）

「やがて元軍は乗船して肥前の鷹嶋に引き上げ、ここに根拠をおいて江南軍を待つことになった」―脚註―中国側の史料には竹島あるいは五竜山白骨山ともいう。（註二）とあるが、

「いったい博多湾に進入した東路軍はその後どうなったのであろうか、最初の作戦計画によれば、東路軍と江南軍とは、必ず六月十五日以前に壱岐で会合する筈であった。そこで志賀島で思うように作戦遂行が出来なかった東路軍の主力は、六月十五日以前に博多湾を引き上げ、壱岐に

向ったものに違いない」（註三）と二説がある。

二月十五日に壱岐で会合すべき第二軍団の江南軍はどうして延着したのであろうか。

東路軍は先導隊に当った高麗兵と元漢の兵からなり立っていたが、江南軍は元に滅ぼされた南宋の降伏兵でその数は十万人といわれ、その艦船は支那内地で建造したもので三千五百艘があてられた。この軍の指揮に当った将軍は蒙古人アラカンと、南宋の降将茫文虎であった。弘安四年の正月両将軍は進撃の命をうけて、江南軍は江南から出航して六月十五日に壱岐島において会合する予定であった。

ところが、五月になって征東行省参議斐国佐というものから建議があった。それによると去る三月中、日本からの漂着船に乗っていた者から、日本の防備の状況をきくと、肥前国の平戸島には防備がなく着船に便利である由だから、江南軍は壱岐島にゆかず、平戸島に向った方が得策であろうということであった。この建言がいれられて最初の予定に変更ができた。かくて江南軍は、東路軍が筑前国の志賀島の合戦で敗れて肥前の国の鷹嶋に退却した頃に、漸く本国の寧波（ニンポウ）を出港して我が国の肥前の国の平戸島に向っていたのである。

さて昨年九州に行き博多の西公園を訪ずれた。西公園はご承知の通り断崖になっておる。岸を洗う小波と、これに戯れる鴎の群れを想像して一昔そうであったから一下を望いてみて噫ッと声をあげて驚いた。其処にみたものは石油タンクの無恰好な配列の姿であり、埋めたての無情な

浜であった。私は憤りさえ感じた。しかし考えてみれば、これは明治の人のみが感ずることだと諦めた。私は妊の浜から眼下にみえる博多の港から、一兵卒として支那大陸に渡ったのだ。それは昭和二十年の四月であった。今生きてこの断崖の上に立つと感無量であった。それはさておき、私はこの断崖の上に立って、元寇の役を思い、この博多湾頭に沢山の蒙古の軍船が覆没したのだとばかり思っていたのであるが、それが間違いであったことを、「元寇の新研究」の著者池内宏氏によって訂正されたのである。然し博多湾を蒙古の軍船が覆没したかと思いこんだのも独断でなく「元寇史蹟の新研究」中山博士の説というのがあるのである。

「愚童訓の〝其後蒙古は遙の沖の鷹嶋にこぎよす―は筑前博多湾口の玄界島のようにきこえ、博多湾とは別方面なる肥前鷹嶋とは受けとり難い、玄界島には百合若大臣の鷹に関する古伝説があり、昔鷹嶋ともいふたやも測り難いのである」

とある。この説がたがれて、博多湾をみて元軍の覆没を相像するようになったのである。

玄界島というのは、福岡湾口の一島で、糸島半島の北端西浦岬と志賀島との間にある、周囲一里ばかりの山島である。

ところが、池内宏氏の「元寇の新研究」で「しかし、東路、江南両軍の弘安の役の所謂神風による、元船の沈没した処は、肥前の鷹嶋附近で（長崎県の伊万里湾口にある）あって、玄界島のある福岡湾口ではない、確実なる古文書の徴すべきものがあって殆ど問題にならぬ」

となっておる。

（註一）「蒙古襲来」中央公論社
（註二）「大モンゴル帝国」人物往来社
（註三）「蒙古襲来」山口修　桃原選書

五

従来の元寇研究者は朝鮮から日本に侵攻した元の東路軍の志賀島の敗戦以後、鷹嶋退屯やその後に起きた壱岐島の壮烈な日本軍の応戦をのべずして、すぐに元軍の博多湾頭の覆滅と話をいそぐが、それは「元寇の新研究」池内宏氏が発表された以後は、大きな変り方をしている。「蒙古襲来の研究」相田二郎氏はその著書の中で、

「日本軍が志賀島方面で東路軍を討った戦いでは、弘安再度の蒙古襲来合戦において一番激しい戦闘が行われたのであったが、実は合戦の序幕にすぎなかった。本当の戦いはこれからであった。然るにこの本当の戦いがどんな経過を辿ったか、従来の元寇研究では十分に明らかにされておらず、その考説には大分誤っていたところがあった。ところが近時池内宏博士が、その専門の

朝鮮史研究の立場から、高麗関係の史料は勿論、支那方面の史料、それに我が国側の史料を照合して綿密に考証をとげられた結果、驚ろく程事実が明らかに知られるに至ったのである」といって、池内宏博士の弘安四年六月六日の夜半から十三日に至る博多湾口の志賀島の戦いの後の、壱岐の島の戦、そして七月一日の元軍の覆滅という二十六日間の戦闘の事実を支持しておるのである。

池内宏博士はその著書の中で、従来忘れられていた壱岐の島の戦いが、日蓮聖人註画讃日澄著の中にもあるとしておるので、ここに引用してみる。

「A、弘安三年庚辰蒙古襲い来って筑前の州志賀島に於いて合戦す、大元国の兵三百七十万騎大船七万余艘に込み乗って責め来る九州の人民悉く逃亡す。B、同四年辛巳五月又蒙古の人高麗以下の国々の兵を駈具して七万三千余艘の大船に乗て責め来たり居住の為とて世路の具をもち耕作の為とて鋤鍬の類を貯へ高麗の舟五百帆は壱岐対島より下りて見あう者を打ち殺す。人民妻子をひきいて深山に逃げかくる、赤子の泣き声をきいて押し寄せて打ち殺す。父母我が命を惜んで赤子を刺し殺しかくれ居たり。

C、然る間蒙古壱岐島によせたりと、

D、博多に告げきたる。既に中国に責め来たらんとす。これによって九国（九州）既に落されて長門の国につきぬ。只今は都に責め上る。又東海北海よりよせきたるかとちまたにかたること

かまびすし。万人一同に暫時も何処へか逃げさるべしとささやき合へり

寛永十三年版　註画讃」

池内宏博士はAは志賀島の事実を伝えたもので弘安三年はいう迄もなく四年の誤り、Bは志賀島を侵す前の行動をのべたのだからこの一節は当然Aの前に移さるべきものである。そして其後賊兵が壱岐に迫ったというCは壱岐における他の襲来の事実としての文永四年六月二十九日及び七月二日の海戦を伝えたものでなければならぬ。最後のDの風聞は、これ等BACと次第せらるべき三節の中志賀島の合戦の間のこととしてAに結びつくべきものである、これは賊船の長門襲来に関する八幡愚童訓の所伝に照して明かである。

Bの項については八幡愚童訓にあるが、これは一が他によった訳ではなくて、各々共通の材料即ち戦地から京都に達した、当時の報告文もしくはそれをかきとめた或る記録に基ずいたからであろう。そうして二書の伝うる所のこの事実は、元軍に屯田の準備のあったことを証するものであり、今回の日本征伐に対するフビライの意気ごみがこれによってわかる……と註画讃を解釈しておる。

さて、志賀島をしりぞいた蒙古軍は何処にいったのであろうか。池内宏博士は肥前伊万里湾の鷹嶋（長崎県北杉浦郡）であると文献をもって証明しておる。

さて支那の寧波（ニンポウ）の港から出発した江南軍兵船三千五百隻は、前述の如く予定を変更したので、

これを東路軍に知らせる必要がある。その先発隊として三百艘の艦船を分遣したが、この先発隊が対島に到着したのは、弘安四年の六月十三日以後から十六日以前と推量される。また東路軍は江南軍に彼等が伊万里湾の鷹嶋――弘安の役の我が軍の防禦区域は福岡湾の沿岸であるが、伊万里の鷹嶋はそこからかけはなれていて船がかかりのよい島であった――におることを知らせようとして鷹嶋から壱岐島に向って出動した。最初の予定では東路軍も江南軍も六月の十五日に壱岐に会する約束であった。故に六月六日夜半の東路軍の志賀島攻撃は、実はぬけがけの功名をねらった戦闘であり、然かもそれが失敗したのであった。東路軍の動きを知った対島に到着した江南軍の先発隊は対島から壱岐島に向かい、ここに両軍が最初の予定のように合同して壱岐島の襲撃を企てた。そしてここに従来忘れられていた、我が軍が両軍を攻撃した壱岐島の合戦が始まるのである。

壱岐島の合戦に関する史料は我が国の古文書にもあったが、その扱い方が悪るかったのでうやむやにされていたが、この合戦が前述のような情勢から起こったことは思いも及ばなかったのが、池内博士の考証の結果判明したのである。

壱岐島の合戦は六月二十九日と古文書にみえている。この日薩摩の守護島津久経の弟大炊助長

久はその国の御家人比志島時範を率いて壱岐島に打渡って敵軍を攻撃しておる。その他長久の甥の式部三郎、その配下の岩谷四郎久親、同じく畠山覚阿弥陀仏、本多兼房等島津の一党が奮戦しておる。薩摩の国につづいて筑前国の守護少弐氏もこの合戦に大奮闘している。少弐経資は壱岐島に打ち渡って軍勢の指揮に当っている。その指揮下に筑前国の御家人も多数参加している。経資の父入道覚恵は当時七十歳を超えるとしにもかかわらず奮戦して後ちに死歿する程の重傷を負うている。少弐氏は蒙古襲来以前から弘安再度の襲来の頃まで、筑前、豊前、肥前、壱岐、対島の所謂三前二島という北九州一番の守護職についていたのである。文永の役には覚恵即ち資能が少弐氏の総領で三前二島の守護職についていたのである。故に家督を経資に譲り渡した老齢の身でありながら弘安の役には壱岐島に渡って奮戦して死歿したことは当時の人々の敬慕するところであった。

また肥前の国の御家人竜造寺小三郎左衛門尉家清は、七月二日壱岐島瀬戸浦という所で戦っておる。肥前の国の松浦党の山代又三郎が壱岐島で合戦して負傷した由が、弘安四年の翌年における彼の戦功検知に関した古文書に見えている。その他竜造寺氏や松浦党の人々とともに肥前の国の彼杵、千葉、高木の諸氏がやはり壱岐島瀬戸浦で戦った。

博多湾沿岸に蒙古勢の上陸を阻止するために構築した石築地を、薩摩国の地頭御家人が守備を分担した地区は箱崎、筑前国の地頭御家人は姪浜、肥後国の地頭御家人は生松原であったが、博

多湾の沿岸の守備をしていた以上の諸国の地頭御家人が一斉に壱岐島に押し渡って蒙古勢と奮戦したのである。

この時、支那の沿岸を発した江南軍が出発時の予定を変更した方針に従って肥前の平戸島に到着したのである。七月二日壱岐島において我が日本軍に敗れた東路軍は江南軍の本隊が平戸島に到着したので、東路軍ならびに江南軍の先発隊は平戸島に赴いて江南軍の本隊と合した。

合同した両軍は愈々攻撃の本戦を開始しようとして七月二十七日その先発隊が、平戸島から鷹嶋へと東進した。次の二十八、二十九日の両日で小の月の七月は終わり閏七月一日となったのである。

「平戸に集った賊船が鷹嶋に移ろまでの日本軍将士の行動については、文献の徴すべきものが殆ど絶無である。要するに東路軍、江南軍がいよいよ攻撃の目的地に迫ろうとして鷹嶋に移るまでの二十数日間の経過は、将来新史料の発見でもなければ詳しいことは何もわからぬ。

肥前の鷹嶋にあつまって将に本舞台に登らんとしつつあった蒙古軍は四日の後なる閏七月一日、たまたま吹きすさんだ台風のために大半覆没した。この意外にしてしかも我が国の上下を喜ばした事変は、弘安四年日記抄の閏七月十一日の条に「異国賊船去る一目夜大風に逢う、大略漂没破損す船済々打ちよせられるの由鎮西飛脚一昨日（九日）か到来の間上下大慶の由謳歌する者也」と記されておる。（註一）

なお八幡愚童訓下によれば、

「去る程に十日余ころ西国早馬着て申しけるは去る七月晦日夜半より乾風おびただしく吹て、閏七月一日賊船悉く漂島して海に沈む。（略）残所の船共は皆破損して磯にあがり、沖にただよいて、海の面に算をちらすにことならず、死人多く重なりて島をつくるに相似たり、鷹嶋（肥前国伊万里湾口にある）に打ち上たる異賊数千人、船なくして疲かれ居たりしが、破れ船共をつくろいて七、八艘に蒙古直麗人おおよそ逃げもどる。是を見て鎮西の兵共、少弐の三郎左衛門尉景資を大将軍として数百艘をもって押し寄する、異国人ども船なければ逃ぐるに不及、今はこうとて命をおしまず散々にたたかう、引組て海へ入りさしちがへて死するもあり、千余人残ししが、ひらに降を乞いけるを、さのみ生けては無益なりとて中河（博多の那珂川）の辺にて首をはぬ、（略）唐人共には少々生けどってある由を披露せし時にこそ、京都関東も静って上下の人々色直しけれ」とある。

元史日本伝によれば、

「八月（日本歴は閏七月）一日風舟を破ぶる。文虎等諸将各自堅好船をえらんで之れに乗る。士卒十余万山下に棄つ（略）七日日本人来たり戦って尽死す。余二三万その虜となる。九日八角島（博多の意）に至たり蒙古高麗漢人尽く殺さる。新附軍（江南軍）は唐人なりとして殺さずして奴となせり略十万の衆還り（得）る者三人のみ」とある。

かくて蒙古の襲来は終った。

註画讃の著者日澄は、

「弘安四年五月以後は勘文（立正安国論）いよいよ符合する故偏執の輩も漸く承伏す。聖人の曰く日蓮房がにくしとて南無妙法蓮華経と唱えずば今一度も二度も大蒙古国より押し寄せて壱岐対馬のように男をば打ち殺し女をば生け取りて京鎌倉に乱入す（略）是れ聖人滅後二百三十七年に当たると雖も、聖人兼ねて未来をかんがみて蒙古起こるべしと記し給う故に之れ出すなり」と結んでおる。

蒙古襲来について拙文を五節に渡って叙述したが、まだまだ蒙古そのものについてはかきたりない。特にその襲来の残忍さは書き足りないと思っておる。この富士を書き始めた時から一度読んでみたいと思っていた本があった。それは外ならぬドーソンの「蒙古史」であった。ところがその本が手に入らぬままになっていた。一度古本市に出たことがあったが、本屋に電話した時には早や売約済ということであった。いつも念頭にあったのがドーソンの蒙古史であった。ところが念願かなってついに岩波書店の昭和四十二年版というのを入手した。そして読了した。そして蒙古の残忍さに全く驚到した。今ならば手に入る書物なので興味をもつ人はドーソンの蒙古史を一読願いたい。蒙古人の破壊した七百年前のパキスタンの潅漑施設を現在米国政府が金を出して

修繕しておることを思えば、弘安の役に蒙古軍が上陸していたら、前述の如く屯田しようと鋤鍬まで持参していた蒙古軍である。日本国家はどうなっていたであろうか。蒙古襲来は二度とも、最後の幕切れがあっけないので、如上のような想像をする日本人はおらないが、ドーソンの蒙古史を読めば、上陸しなかったことにほっと胸をなで、このような野獣の襲来を十四年も前に文書をもって予言し、その予言のために二度も島流しに逢い、首の座に迄すわった大聖人に我々は大いに感謝しなければならないのだが、文永の蒙古の牒状は不穏当ではないという人がいたり、「日蓮が身を挺して国難に赴こうとする愛国者ではなかったことはこの一文（撰時抄の一文を引用して）でも明らかである」という人がいるのだから、我々はもっともっと信心に住して大いに折伏にはげまねばならない。

大聖人は「大事の法門と申すは別に侯はず、時に当りて我がため国のため大事なる事を少しも勘えたがへざるが智者にては侯也」と法門のことを定義しておることを我々は忘れてはならない。貴重な紙面ではあるが、文永の蒙古の牒状が不穏当でないというのなら、ドーソンの「蒙古史」の一節を引用するからそれを読んで、蒙古人は一体どんなことをしたかを照会しておこう。

「蒙古兵はかくてその劫掠いたる地方の中央に舎営し、牛馬を始として種々の捕獲品を多量に所有し、夥しき男女の捕虜を擁しこれを種々の庸役虐使したり。此の地方の住民の多数は森林に避難せり、蒙古兵は森林を馳駆せるもこれら薄幸の徒を悉く検出得ざりしを以って即ち術策を弄し

たり。即ちその捕獲した一部を放免して之に告げて云く蒙古人を信じて一定の期間に帰りきたるものに向ては、敢て之を妨害せずと。避難者の飢餓に苦しみ死に瀕せるものは、この公約をたのみてその住宅に帰り、約一百の村落は再びその住民を得たり。この村落はいずれも一人の蒙古人を駐在せしめて之を支配せしめしが、時あたかも収穫の季節に当りしを以て、農民は小麦を刈て麦粉を製するがため多忙を極めたり。村人は度々妻女姉妹の目前に於いて蒙古人に辱められるるをみて憤慨おく能わず之れを保護せんとしてその命を失うものありき、而して艶麗おる女子は之れを村落の駐在官たは蒙古人に献ぜしに、蒙古人は牛馬を与えて之に酬いたり。然るに小麦葡萄の収穫終了するや、これらの村の駐在官たる豆家古人は協議を行い、各村の住民はすべて一定の日を以って献納物をもたらすべく、しかして家族を悉く同伴すべしと命じたり。而してこの薄幸の民の献納物をおさむるや之れを渓谷に送くり、先づその衣服をはぎて之れを虐殺しつくしたり」

（註二）

「勧降書を拒絶してその城門を開かずその塁壁内堡をこわさざりし為、十日間の攻撃を受け、住民は悉く出城を命ぜられ蒙古兵諸隊の間に分配されて虐殺されたり。一老婦あり将に最後の打撃をうけんとせる時、赦せば美なる真珠を与えんと叫べり、故に之を求めしに既に嚥下せりと答えたり、茲に直ちにその腹をさきて首尾よく一顆の真珠をさぐり出すを得たり、ジンギスカンは等しく嚥下せるものあらんとの推定より死者の腹部をさくべしとの命令を下したり」

「ジンギスカンは前進する時、陣後に人口の夥しき城市の存するを好まず、城民の人口を調査せんと称して悉くこれを出城せしめて以て虐殺しつくせり」

「蒙古兵は都城を掠奪して灰尽となしその城塞を破毀せり蒙古人の習慣としてその旗下に収めて従軍を許可せる外国軍隊をして蒙古の風俗にならわしむるが故に、捕虜をして前頭部の髪毛をそりて蒙古人の如く弁髪をむすばしむ、但しこれも敵を滅すと定めたる瞬間迄之れを安心せしむるの策にすぎず、戦終われば、その捕虜は諸将もふくめて悉く虐殺し、その馬匹家族幅輻重は戦勝者の戦利品とせり」（註三）

蒙古に襲われて一番長く占領下にあったのはロシヤであった。二百年に渡ってロシヤを支配した金帳（キプチャク）汗国は分裂してボルガ中流のカザン汗国クリミヤ半島一帯のクリミヤ汗国ボルガ下流のアストラ汗国、西シベリヤのシベリヤ汗国と勢力は弱まり、ついにイワン雷帝がカザン汗国をおとした一五二五年をもってモンゴルの勢力下をはなれ、としておるがそれはジンギスカン滅後実に二百八十三年であった。

（註一）　「元寇の新研究」池内　宏著

（註二）　ドーソン「蒙古史　下」

（註三）　同　　右